大学入試改革「新テスト」情報

国大協、共通テスト「ガイドライン（案）」提示！

英語の検定は「出願資格」「加点」、記述は点数化！

旺文社 教育情報センター 平成 30 年 3 月 22 日

国立大学協会は 3 月 8 日の総会で、共通テストに関わる「ガイドライン（案）」について協議を行った。これは英語の外部検定と、国語・数学の記述式の扱いについて、国立大共通の指針を示したものだ。

国大協はすでに昨年 11 月、共通テストに関する「基本方針」を公表し、英語の外部検定や、国語・数学の記述式を一般選抜で必須にする方針を出していた。ガイドライン（案）はそこからさらに 1 歩踏み込み、利用方法などを示している。

必ずしもすべての国立大がこのとおりに入試を行うものではないが、それでもガイドラインは強い影響力を持つ。ガイドラインの最終的な決定・公表は 4 月以降になるとみられる。

●ガイドライン（案）の内容

※以下、すべて「共通テスト」に関するもの。個別入試ではない。

(1) 英語の外部検定

・利用できる検定は、認定試験すべてを対象。

・利用方法は、「出願資格」「加点」のいずれか、または双方。

・「出願資格」で求めるレベルは、受験機会の確保に十分配慮。

・「加点」の具体的な点数は、CEFR 表に基づいて各大学が設定。配点ウエイトは適切に。

(2) 記述式（国語）

・段階別で示される成績を点数化し、国語の得点に加点。

・具体的な点数等は、各大学が設定。

(3) 記述式（数学）

・数学の記述式は配点がなされることから、従来のマーク式と同様に扱う。

※英語の外部検定や、国語の記述式に関する具体的な例は別途、国大協が示す。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

●解説①　－英語の外部検定－

11 月の国大協「基本方針」では、一般選抜の 1 次で、共通テストの英語と外部検定の両方を必須にする方針が出され、「外部検定必須」という大きなインパクトを与えた。ガイドライン（案）では「利用できる検定」と「利用方法」の概要が示された。

現在行われている外部検定利用入試では、利用方法は「出願資格」「得点換算」「加点」が一般的。このうちのどれになるのか、また、「必須」とどう折り合いを付けるのかが注目されていた。

ガイドライン（案）では「出願資格」「加点」のいずれか、または双方となったが、それぞれのイメージを「必須」との関係とあわせて見てみよう（以下の例は旺文社による。ガイドライン（案）では加点の配点例は示されていない）。

■「出願資格」「加点」イメージ

・「出願資格」「加点」双方の場合

【例；英検準 2 級＝出願資格、2 級＝10 点加点、準 1 級＝20 点加点】

⇒ 出願資格なので「必須」とわかりやすい。また、取得レベルに応じて優遇される。

・「出願資格」のみの場合

【例；英検準 2 級＝出願資格】

⇒ 出願資格なので「必須」とわかりやすい。ただし、より上位のレベルを取得しても、優遇されるわけではない。

・「加点」のみの場合

【例；英検準 2 級＝10 点加点、2 級＝20 点加点、準 1 級＝30 点加点】

⇒ 取得レベルに応じて優遇されるメリットはある。ただし、どう必須にするのか不明。上記例の場合、「3 級以下は加点対象にならないが、とにかく外部検定の受検が必要」とすれば必須にはなるが、検定受検はタダではない。受験生の納得感が得られるか。

気になる加点の度合いは示されず、CEFR 表に基づいて各大学が独自に設定するとされた。CEFR 表は刻みが大きく、日本の高校生の英語力では一定のランクに集中する。現状の外部検定利用入試では、独自にさらに細かく刻む大学もあるが、すべての大学でできることではない。多くの大学が CEFR 表どおりの大きな刻みで設定をしてくると予想される。

また、利用できる検定は、認定試験すべてが対象となった。認定試験というのは、共通テストで利用できる外部検定について、大学入試センターによる要件確認を通ったもの。今月中に公表される予定だ。国立大で利用する検定が統一化されれば、受験生も利用しやすい。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

●解説②　－記述式（国語）－

11 月の国大協「基本方針」では、一般選抜で国語・数学の記述式を必須にする方針が出されていた。ガイドライン（案）は、その成績の活用方法を示したことになる。

段階別（3～5 段階程度）で成績表示される記述式をどうやって合否判定に活用するのか。国語は点数化という単純明快な案が提示された。

ただし 3 問程度出題される中で、解答文字数が 20 文字程度の問題もあれば、120 文字程度の問題もあろう。これらを同じ配点にするのも乱暴だが、各国立大が独自に差をつけるのも難しい。

また、ガイドライン（案）では、加点の配点は各大学に委ね、国大協は具体例を別途示すとしている。マーク式の満点を超えて加点がなされるようであれば（マーク式の満点を上限に加点もありうる）、大学によって国語全体の満点も変わってくる。入試システムは複雑になるばかりだ。

もはや段階別で成績を出す意義は薄い。大学入試センターが共通テストの記述式自体を素点（「1 点～5 点」などの段階別素点）で、かつ満点の範囲内で出すようにした方が、高校生も大学も利用しやすいだろう。

●解説③　－記述式（数学）－

数学について、ガイドライン（案）では「記述式問題にも配点がなされる」とされている。そもそも大学入試センターは、数学の記述式が素点か段階別か、まだ明らかにしていないが、素点になるのが濃厚だろう（試行調査の採点が○か×かで、それ以上の段階別ではなかったという点、出題がマークと混在になる点から）。

しかし段階別の場合は当然、「満点外で段階別」の成績だろうが、素点となると満点内か。私立大の中には記述式を判定に利用するかどうか検討を行っている大学もあるが、「満点内で素点」となるのなら、そもそも利用せざるを得ない。

●今後の流れ

国大協のガイドラインは、4 月以降に最終決定・公表がなされる見込みで、これらをもとに各国立大は年度末へ向けて「予告」を出していくものと思われる。公私立大の予告は、国立大がある程度出始めてからだろう。

それにしても今回のガイドライン（案）で改めて明らかになったのが、共通テストそのものの未確定箇所だ。高校生や高校側は当然、各大学の予告が具体的であることを望んでいるが、現状では大学側も難しい。

11 月と 2 月に行われた共通テストの試行調査の結果はすでに速報が公表されているが、全体結果は 3 月中に予定されている。これらを踏まえてより具体的な制度設計が進むことを期待したい。

(c)2018 旺文社 教育情報センター